



いろいろ生きもの通信

NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉

生きものモニタリング調査について

みどり自然課から、県民参加生きものモニタリング調査を依頼されたのは2009年であった。以来、10年間に亘り生きものモニタリング調査を続けることができた。調査内容は多少の変容があるものの、基本的には埼玉県内の生物多様性保全に資する生きものデータベース作成のための基礎調査であった。

調査団体の募集にあたって、みどり自然課から県内各地で活躍する生物多様性保全活動を行っている団体に働きかけた他、(公財)さいたま緑のトラスト協会を通じて、県内のトラスト保全地で活動しているメンバーに声をかけた。さらにみどり自然課のホームページを通じて広く県民に参加を呼び掛けた。

当初は、各団体の活動するフィールドに生育・生息する動植物について、調査種を指定して調べてもらった。その後、指定種を設けずに観察されたものすべてについて記録することをお願いした。さらに、最後の3年間は、外来種を中心に調査を行った。この外来種調査はこれまで行なわれなかった大規模な市民参加型の調査であり県としても初めての取り組みであった。結果として、3年間で調査できた3次メッシュ数は、837になり、埼玉県全体の21.7%にもなった。

平成22年度末に各団体に対してアンケートを取った結果からは、我々の予想していた以上に積極的に取り組んでもらった様子があった。以下、主な意見をあげる。

- ① 調査費が会の活動資金の増加につながり活動がしやすくなった (20団体)。
- ② ふだんの活動場所の自然環境の状態がよく理解できるようになった (19団体)。
- ③ 調査を通して県内の自然環境の把握に貢献していることを自覚できた (16団体)。
- ④ 県との協働につながる活動ができて意義がある (13団体)。
- ⑤ いろいろな意味で会の活性化につながった (7団体)。

ボランティア頼みの環境保全団体にとっては調

査費として活動資金が得られることは大きなメリットであったことが伺える。また、自分たちの活動場所をあらためて調べることにより、身近な動植物に関心を持つようになったことは大きな成果であった。さらに、県内の自然環境に対する関心を高めたこと、県との協働事業ができたことも評価された。

次に、最後の3年間に行われた外来種調査結果から特徴的なことをあげることにする。

外来植物については、各参加団体の協力により全県を網羅する形で外来種概数400種について35,000件の報告をいただいた。この報告件数の内訳をみると、いわゆる環境省の生態系被害防止外来種リスト掲載種に係る報告が約100種10,000件であった。残りの300種25,000件は一般の外来種(逸出・栽培・植栽を含む)となる。また、生態系被害防止外来種リスト掲載種と重複する形になるが、特定外来生物として指定されているアレチウリ、オオフサモ、オオカワチシャ、オオキンケイギク等については、内数で8種約900件、全体の2.7%であった。

特徴的な種についてみると、アレチウリは400件の報告があり、生育環境は河川敷が250件(63%)で過半数となった。山間部を除き県内全域に自生し、この状況は10年前とほぼ同じで定着段階に達していると考えられる。

オオフサモは、100件の報告があり、河川敷の報告が86%を占める。2000年には庄和・岩槻・八潮の限定分布であったが、2010年には県東部から県西部に分布が拡大した。河川に沿って現在も拡大傾向にある。

今回の調査によって本県の外来植物の分布はかなり鮮明になった。このような大がかりな調査例はあまりなく、将来的にみて本調査結果は貴重な比較対象データとなるだろう。

外来動物については、報告件数が一番多かったのはガビチョウの246件であった。さらに、アメリカザリガニの221件、アカボシゴマダラの214件、ウシガエルの192件、アカミミガメの168件と続く。近年移入されたガビチョウやアカミミガメ、

第5回生きものフォーラム

当会では、生物多様性などの課題について、多くの方々と情報や意見を交換する場として、「生きものフォーラム」を定期的で開催しています。第5回目は次のとおり開催いたしました。

シカ・イノシシなど野生動物の ～現状を考える～

日時 平成31年2月23日（土）13:30～16:30

会場 市民会館うらわ101集会室

参加人数 54名

【プログラム】

■ 基調講演

「シカ問題を解決する－シカ問題の現状と対策」

日本獣医生命科学大学教授 羽山伸一

■ 事例報告1

「埼玉県のシカの現状」

埼玉県環境科学国際センター 角田裕志

■ 事例報告2

「シカ被害防止に関する取組とハンターによる捕獲の実態」

埼玉県寄居林業事務所森林研究室 森田厚

■ 事例報告3

「鳥獣被害対策隊など飯能市の取組」

飯能市農業振興課鳥獣被害対策室主幹 宮寺裕章

まず主催者から、今回は捕獲の3形態（狩猟、有害捕獲、管理捕獲）のすべての話が聞ける。メンバーも楽しみにしているとの挨拶があった。

基調講演では、丹沢での調査研究活動の実績を踏まえ、個体数をピークの1/3にまで減らした神奈川県との総合的な取り組み（神奈川県+環境省+林野庁+国交省の関連事業の集中実施）が紹介された。2012年以降は捕獲専門職員（ワイルドライフレンジャー）を設置している。また、「減少させるにはプロの力が必要。行政は縦割りではなく関連した事業を集中的に実施すべき。また担い手はシカのプロが担当すべき。」と強調された。全国的に専門家を有している自治体は少ない。

事例報告1では、県内のシカ生息域が増え、現在は県西部の山岳・丘陵地域に広く分布していること、2010年と2015年を比較しても植被率が



大きく低下する、土砂の流出による裸地化など被害が甚大なこと、最近2年は3000頭以上捕獲したなどが報告された。

事例報告2では、有害捕獲の担当者であり、私人（ハンター）として狩猟の担い手でもある講演者の報告。近年は伐採した後に植林しても食害がひどく結局植林あきらめたことがあること、防護ネットを300ha以上設置したが限界あり、捕獲も必要、ハンターとして猟期に25日山に入り巻き狩りをしていることなどが報告された。

事例報告3では、2017年4月に市職員80数名による鳥獣被害対策隊を設置した経緯や実績、止め刺しの方法などリアルでシリアスな研修ビデオの上映、ボランティアとしての活動の実態など、興味深い報告がなされた。

事例報告4では、まだ数が少ない管理捕獲専門事業者からの報告である。埼玉県の委託で3年間に450頭とってきた。3k（きつい・かゆい・危険な仕事）だが、減らすこと、減った状態維持することをモチベーションとし、担い手が少ない、活動と報酬がリンクしきれていない、趣味の狩猟者とは矛盾がある、など課題があるが努力していると報告があった。

最後に活発に質疑応答がなされた。専門的なテーマであったが、ご参加いただいた皆様、ご講演いただいた方々、ご支援をいただいたサイサン環境保全基金様に心よりお礼を申し上げます。

（脇坂純一）

身近な生態を補償する

県央域は1970年代以降農林地などの緑地が減少した。高崎線沿線の上尾市鴨川域では迫りくる都市開発に備え、「緑と清流の豊かな街づくり」を目指し1973年から土地区画整備事業を開始した。1986年までに区画整理を終え（同竣功記念碑文より）、大きな樹木は公園内に保全され、市民は防風林を保全、畑や庭に野菜や花木を植栽した。昨今キジやタヌキ、イタチなど大きい生き物は見られないが、カラ類、エナガ、メジロ、コゲラ、カッコウ（写真2）、アゲハなどは生存している。

筆者は20年前から有害性が少なく保全したい生き物のテントウムシ、アゲハ類、タテハ類、ラミーカミキリ、クマバチなどを守るために、庭や空き地に花木や蜜源植物を植えて生態補償地（写真1、平井、2019）を設けた。そこで保全された主な生き物の概要を示す。



1. 庭のテントウムシを十数年から観察した結果、越冬後成虫は早春にローズマリー、タチヤナギ、ユキヤナギに集まり、次いでダイオウグミ、コデマリ、ムクゲ、そしてウメ、プラム、ネムノキなどに広がり、その次世代は草本に分散、秋には豆類やバラで生息、その後越冬に入った。
2. ジャコウアゲハは茂みをゆっくり飛ぶのでペットのように楽しめる。数年の観察では成虫は4月ウマノスズクサに産卵開始、年3回の発生ピーク、9月に蛹化し越冬に入った。
3. アオスジアゲハ（写真3）は移動性に富み素早く吸蜜しては飛び去る。越冬世代の成虫は春にダイコンの花、その後ハーブ、ブッドレアなどで吸蜜、産卵は植栽したクスノキ科（シ

ロダモ、クスノキ）に5月以降観察された。しかし天敵の卵寄生蜂、アシナガバチ、キセイバエ、アリ、クモなどに襲われ夏以前の蛹化は少なかったが、9月になって多くなった。

4. キタテハはカナムグラに卵～成虫までかなり多い。ヨモギを食草にするヒメアカタテハも多い。マメ科に寄生するコムスジも頻繁に見られる。
5. カラムシに寄生するアカタテハは年に数個体だが、定着している。サルトリイバラやホト



トギスに寄生するルリタテハの観察数はアカタテハと同様である。

以上、地域の生息地を補う生態補償地でテントウムシとジャコウアゲハ、タテハ類は周年見られるようになった。その他の生き物についても常に見られるように生態を補い生活の質を高めるようにしたい。（平井一男）

参考文献

平井一男(2019)生態補償地（緑のオアシス）pp.44,NPO法人自然環境観察会広報誌-3.

気になる生きもの

その12 コウノトリ

特別天然記念物であるコウノトリは翼を広げると2m近い大型鳥です。鴻巣市は、市名に由来することもあり、「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」の中心として熱心な再生活動を進めています。NPO法人鴻巣

コウノトリを育む会では、餌場となる冬みず田んぼの創出・維持などの活動を続けており、その甲斐あって、昨年8月に野田市で飼育・放鳥され

たコウノトリが鴻巣市に舞い降りました。地域の機運もさらに高まっているそうです。

野生生物の再生は生態系を理解する上で貴重な教科書です。再生が進むと、野生生物と共生する上での様々な課題を現代社会に突き付けてくるでしょう。令和の埼玉の空を優雅に舞うコウノトリは、近い将来、



生きものフォーラムのお知らせ

第6回生きものフォーラムを開催します。

「県民参加生きもの調査結果をどう活かすか」

10年間続いた県民参加モニタリング調査が昨年度で終了し、多くの観測データと参加60団体の調査経験が成果として残りました。市民参加によるこの成果の活かし方を考えます。

日時：令和元年10月16日（水）13:00～16:30

会場：埼玉会館7 B会議室

主催：いろいろ生きものネット埼玉・自然観察指導員埼玉

【プログラム】

■ 基調講演

「市民による自然環境モニタリング調査の意義」

福田 真由子 氏（公財）日本自然保護協会

■ 基調報告

「県民参加モニタリング調査結果」

牧野 彰吾 氏 NPO法人 自然観察指導員埼玉

その13 ナガミヒナゲシ

ヒナゲシ（雛芥子）というと、世代的にはアグネスチャンの唄のせいか、可憐な花というイメージです。ところが、こちらは繁殖力が非常に強いエイリアンです。特定外来生物ではありませんが、生態系への影響に注意が必要なようです。

最近、道路脇などでオレンジ色の花をつけたこのヒナゲシを見かける方も多いと思います。ナガミを漢字で書くと「長実」、その名のとおり長い果実（芥子坊主）を持ち、その中に約1,600個の種子が入っているそうです。1個体に100個の果実を付けることもあるため、まさに大量の種子を周囲にばら撒き繁殖する能力があるのです。

我が職場では周辺の除草をしていますが、残念ながら毎年5月頃には、またこの花に遭遇します。いつか、「丘の上、ナガミヒナゲシの花で～」とならないことを祈るばかりです。（星野弘



会員のつづやき

■ 昨年の9月にボルネオ島のキナバタンガン川流域とタピン自然保護区に行ってきました。約20年前、ダナンバレーという地域を訪れ、その時目にした多様な動植物、美しい熱帯雨林が忘れられずに、再びボルネオ島に行くことにしました。今回も多くの哺乳類、鳥類を観察でき、念願であったオランウータンにも遭遇してボルネオの素晴らしさを改めて感じました。しかし、今回訪れた自然保護区はパームヤシの畑に囲まれていて、熱帯雨林の開発と生態系保護の問題はつきません。大好きなボルネオの豊かな生態系がいつまでも保たれることを願うばかりです。（野澤裕子）

いろいろ生きもの通信 No.7

■ 発行日 2019年9月1日

■ 発行 NPO法人

いろいろ生きものネット埼玉

■ 事務局 さいたま市大宮区大門